

「Face-To-Faceの会」だより

大阪市大における医療連携プログラム

第五号 2009年 11月 発行：大阪市立大学病院「Face-to-Faceの会」 文責：荒川哲男(代表世話人) 連絡先：06-6645-2711 庶務課 富山 康弘

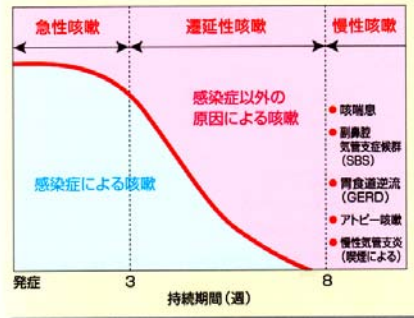
定着してきたユニークな勉強会

昨日の豪雨が嘘のような秋晴れとなった11月14日の土曜日午後3時から、57名が参加して始まりました。今回で**11回目になるFTFの会**ですが、アンケート結果から、「**さまざまな科の勉強ができてよかった**」などの声がありました。また、とくにミニレクチャーは「**非常に良かった**」が50%を上回りました。



症例から：慢性咳嗽から学ぶ落とし穴

呼吸器内科の大学院生渡辺徹也先生から、よく見られる症例であるが、意外な展開で鑑別診断に特徴のあった**慢性咳嗽**の3症例を紹介いただきました。**8週間以上続く咳嗽**がこれにあたり、感染が先行するかしないかでまず大別します。1例目はリウマトレックスによる間質性肺炎が疑われたが咳喘息だった症例。2例目はCTではじめてわかった肺癌。3例目は炎症性の気管支閉塞で何とピーナッツ誤嚥による異物性炎症。自分で気づけなかったのかなー??原因で多いのが**咳喘息**で50%、次いで副鼻腔気管支症候群15%、胃食道逆流症12%となる。ACE阻害剤は1%。



フロアから、**成人の百日咳を疑うポイント**は何かとの質問があり、子供との共同生活が留意点とのことでした。また、金澤 博准教授から、咳喘息に関するコメントをいただき、対症療法のみで治療していると本当の喘息になることを知りました。一方、アトピー咳嗽は太い気

管支が主座なので対症療法でよいことも学びました。しかし、実際の診療の場では鑑別が難しいので紹介を。



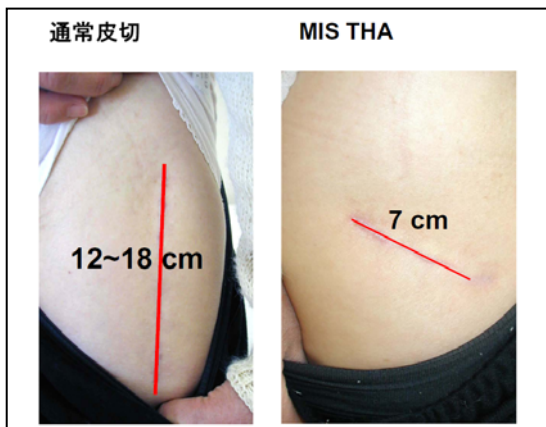
症例から：筋肉を切離さない人工股関節置換術とは

続いて整形外科講師の岩城啓好先生から、症例を通して股関節手術の変遷をお話いただきました。

本邦で年間3万例が人工股関節手術を受けているそうです。従来は15 cm以上も皮膚切開していたそうですが、**今は6-7 cmに縮小している**とのことでした。しかし、筋肉を切離す手術では、皮切の大小は術後の歩行機能回復



に関係しないことから、筋肉を切離さない手術が考案されました。当科でも5年くらい前から取り入れられた新しい試みです。従来の手術では、150 mの歩行が可能になるまで平均15日を要していましたが、**筋肉を切らない手術にしてからは、平均10日に短縮**したそうです。問題は同科の股関節手術の入院待ちが5ヶ月と長いことです。急ぐ症例は関連病院で行うこともできます。インプラントは欧米製で日本人には合わないのでは?との質問には、日本人に適合するものも作ってもらっているとのことでした。



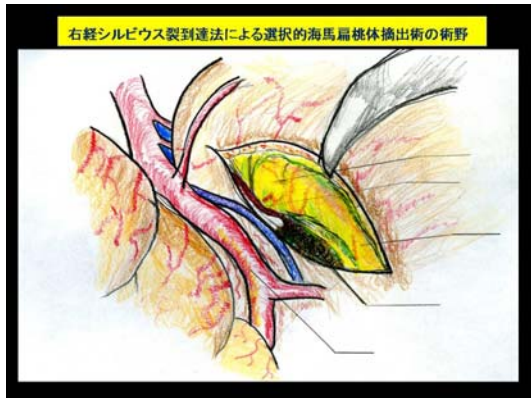
「難治性てんかん」に朗報：手術で治る

ミニレクチャーでは、脳神経科の森野道晴准教授から、**脳外科手術の最前線**をご紹介します。薬物療法に抵抗する難治性てんかんの患者は10-20万人(てんかん総数100万人)とされています。森野先生はこれまで400例以上の手術を行ってきましたが、**側頭葉てんかんはとくに奏功する**率が高く、70-80%でてんかん発作が消失したそうです。術式は、留学中に学んでこられた**選択的海馬扁桃切除術**がもっとも多いですが、最近ではより**低侵襲な海馬多切術**を行っています。これは、海馬の萎縮の少ない人に有用です。



原因は、新生児仮死や熱性けいれんなどによる幼少時の軽い低酸素で海馬が変性して硬化することで、10-12歳ごろに発症。発作の前兆として、口をもぐもぐさせたり意味不明の行動、言語を発することから、**精神疾患と誤診されることも多い**とか。診断はMRによる画像診断が有用。脳波(EEG)も有用

ですが、海馬は深い部位なので、穿刺による蝶形骨誘導が必要な場合が多い。PETは血流異常から診断に有用。最新鋭機器として**MEG(脳磁図)**は異常な磁場をとらえ、MRIに投影して部位を同定できるので、最近、診断に用いられています。



てんかんが怖いのは、発作が起こると入浴中に溺死したり、料理中に火傷を負ったり、自動車事故などにつながるからです。手術の合併症としては、失語、記名力低下、片麻痺、視野障害、感染(髄膜炎)などがありますが、頻度は少ないです。当科での選択的海馬扁桃摘出術後の脳機能(言語性、視覚性、一般、集中力、遅延再生)は左脳は術前と同じかやや良くなり、右脳は術後の方が良くなるそうです。私も手術してもらおうかな?

患者さんのエピソードで、面白かったのは36歳女性。抗てんかん薬服用していたが、1ヶ月に2-3回発作に20年以上悩み続けて、ようやく森野先生にたどり着いた。手術で発作が消失し良かったことで号泣。うれしくて泣いているのかと思いきや、「青春を返して！」と逆ギレされたとのことでした。もっと早くしておけば青春はもっと良かったはずとの後悔から、悔しさをぶつけられたようです。

紹介して欲いてんかん患者として、服薬しても発作が週から月1回起こる薬物治療で改善しない患者さんだそうです。

情報提供コーナー：NST医療連携

NST directorで肝胆膵外科の大場一輝先生より、8月29日に行われた**第1回NST医療連携イノベーション in OSAKA**の報告と周術期栄養地域連携の紹介をいただきました。栄養管理を主軸においた医療連携は、**安全な手術、早期離床、早期退院、在宅への移行に**



重要です。それ以外にも**肝疾患、糖尿病、癌、炎症性腸疾患**などにも、このような栄養医療連携の重要性が最近注目を集めています。

和気藹々のアフター5

会の後、親交を深めるためにささやかな懇親の場を学舎3階の生協食堂で行いました。おなじみになった面々や初対面の先生方も和気藹々のひとときを過ごしました。まさにFace-to-Faceを地でいってました。



医療連携勉強会のお知らせ

第12回『Face-To-Faceの会』

- ・症例：2題
- ・ミニレクチャー：「メタボ時代の糖尿病マネジメント」
演者：代謝内分泌内科 講師 絵本正憲先生
- ・日時：**平成22年2月13日(土)** 午後3時～5時
- ・会場：大阪市立大学医学部学舎6階 中講義室